

城のある都市復活

福岡城だより

2019.秋
AUTUMN
No.63



福岡城・城下町フォトコンテスト入賞作品 「晩秋の頃」 高鷹 春一様

令和の幕開けに思う

福岡商工会議所 会頭 藤永 憲一



本年5月、令和の世が幕を開けました。新元号の典拠は、大宰府政庁の大宰帥であった大伴旅人が730年1月、邸宅で催した梅花の宴で詠んだ万葉集にある歌の序文「初春令月、気淑風和」とされています。

この時代、福岡城跡の場所には、わが国の対外交流機能を担う大宰府の交渉窓口であった鴻臚館（設置当時は筑紫館・つくしのむろつみ）が置かれていました。鴻臚館は大宰府とほぼ直線の古代官道で結ばれており、今でもこの地には往來の遣唐使や役人達が歌った万葉歌碑がその名残をとどめています。

現在、福岡城跡と鴻臚館跡は福岡市の整備基本計画によって櫓、屋敷及び館の整備・復元が進んでいます。福岡商工会議所ではこの2つの国史跡整備の早期実現と、舞鶴公園と大濠公園が一体となった福岡の歴史・芸術文化・観光の発信拠点「福岡セントラルパーク構想」の推進を福岡市へ要望しています。これらが実現すれば、江戸時代の城跡の中に、古代の風景が重なる日本中どこにもない重層的な歴史文化を体験できる一大ランドマークとなることでしょう。

この新時代「令和」の新風に乗って、元号ゆかりの地として湧く太宰府と新名所の福岡セントラルパークが再び古代のように繋がりを、広域の観光ルートとなれば、相互の誘客で、インバウンドなどにより大きな相乗効果が生まれ、福岡市は名実ともに国内有数の国際観光都市へと飛躍していくことと思います。

福岡市民の会会員 室川 康男 (画・文)

「三の丸御殿（御下屋敷）・お能」

藤の花の甘い香りが漂う、ここ三の丸御殿。張り詰めた空気をつん裂くように響く大鼓（おおかわ）、小鼓の音にのって喜多流謡曲の調べが厳かに朗々と流れています。能舞台では、今まさにお能が佳境に入っています。演目は「藤」。黒田家の家紋・藤に困って演じられています。

藩主、大奥以下、家臣、奥女中達が観る中、おや、後ろの方で領民達がめかし込んで神妙に見物していますよ。

九代藩主斎隆（なりたか）公が造営した三の丸御殿の規模は南北250m、東西200m。北側に隣接して池と茶屋を配した「逍遙ノ茶室」と呼ばれる「御庭」がありました。建物は「表御殿」（手前、南半分）と「奥御殿」（奥、北半分）からなっていました。三ノ丸御殿は寛文11年（1671）三代藩主光之公がこの三の丸西部に造営以後、何度も増改築を繰り返してきましたが、常に表御門前の「下り松」が格式と美観を添えていました。

「表御殿」は主に儀礼を行う場所や、家老が諸役人と政務を執り行う部屋、各役所のための諸室で構成されていました。一方、「奥御殿」は藩主の執務と生活のための空間で、中央には御台所があり、そしてその奥には「御鈴廊下」（鈴によって出入りの連絡が行われていた）を挟んで「大奥（御構）」の諸室がありました。

御殿の南、大書院前庭には「能舞台」が設けられていました。能舞台では代々、藩主が家督を継ぐ時、厄明け、少将就任や嫡子の誕生を祝って能が演じられ、この時は家臣を始め領民達にも拝見が許されました。

画の場面は、嘉永7年（1854）に「黒田如水250年忌の神事能」が催された時の情景です。能舞台正面の大書院の間では藩主、家老、大奥が参列し、中庭、二の間、三の間、御弓の間の座敷では重臣が、大書院横の棧敷では奥女中達が拝見しています。庭では身分によって拝見場所が区別され、舞台に近い方が諸士拝見所で家臣、僧侶、庄屋などが、そして最も遠い無礼拝見所では百姓、町人、浦人など領民が拝見しています。

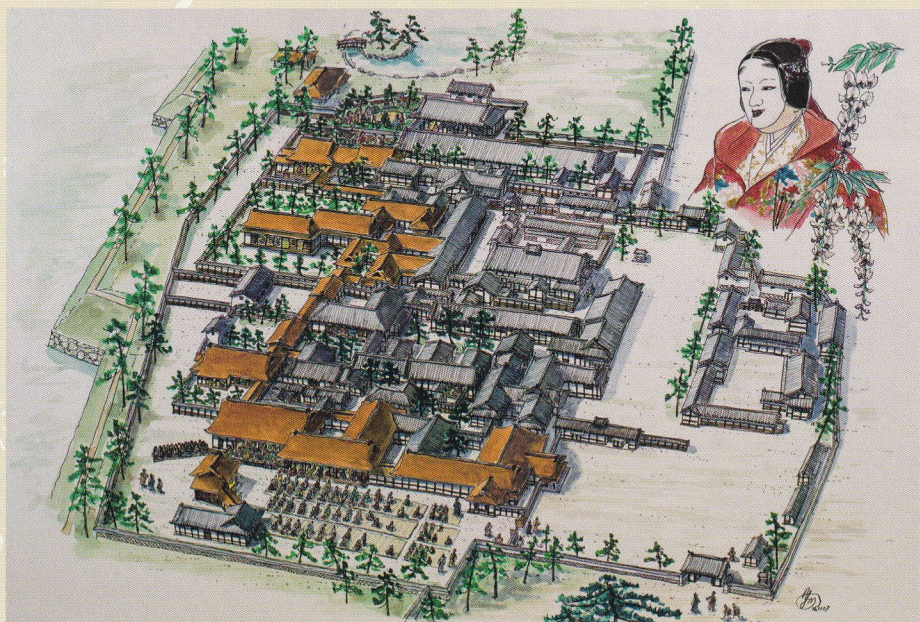
「松囃子・三の丸御殿入り」

朝五つ時（午前8時頃）、「博多松囃子」の一行が上ノ橋御門から城内に入り、三の丸御殿表御門から御殿内にやってきました。今、唐破風の玄関前にて出迎えの家臣に「祝うたあ〜」と挨拶をしています。この日は大勢の一般町人達も見物を許されて入城してきています。

一行はこのあと中庭（左奥）に入り、能舞台の前まで回って、御弓ノ間の縁先で稚児舞や踊り手品を披露します。

「松囃子」は博多の年中行事（正月十五日）で、一時途絶えていたのを二代藩主黒田忠之の命により寛永19年（1642）再開され、町人町博多部から城下町福岡部へ入り、藩主に年賀の挨拶をすることになりました。

（新修福岡市史特別編「福岡城」などを参照）





明治に活躍した福岡藩の先人たち

福岡市民の会ガイド 秦 紀代子

第三回

「栗野 慎一郎」

明治中期に政府や経済界で活躍しながら、意外と知られていない福岡藩の先人を紹介するシリーズ、今回取り上げる栗野慎一郎は、維新後の近代化の歩みに外交の分野で大きく貢献した人物です。

栗野慎一郎は嘉永4年（1851）11月7日、筑前国福岡の荒戸谷町で生まれました。父は城代組八石三人扶持でしたから、足軽より少し上くらいの下級武士です。15歳の時、当時の三大私塾の一つであった瀧田塾に入り、漢学、国学、蘭学を学びます。父が急死し大変苦労しますが、非常に優秀で、17歳の時長崎に派遣され英語を学んでいます。この長崎留学で福岡藩士による英兵殺害事件に巻き込まれ、京都送りになっています。同藩の志士平野國臣が殺された六角の獄で最期の覚悟までしたようですが、結局釈放されます。金子堅太郎と團琢磨がアメリカに留学した時、栗野も推薦されましたが、長崎の事件のせいで外されません。現場に居合わせただけの栗野にはとんだ災難でしたが、この時イギリスの高圧的な態度を見たことが、外交の道に進むという後の選択に影響したと言われています。

明治8年（1875）25歳の時、黒田長溥の推薦・費用負担でアメリカに留学、ハーバード大学で法制度を学びました。6年間学んで帰国し、念願の外務省に入ります。この時31歳、外交官栗野慎一郎の誕生です。当時の外交の最重要課題は不平等条約の改正、近代国家として歩もうとする日本の悲願でした。改正草案をめぐる上司との大激論のすえ外務省を退いた時期に、大隈重信外相襲撃やロシア皇太子斬り付け事件など、条約改正がぶつ飛びような事態が

起き、歩みは停滞していました。そんな中、切れ者陸奥宗光が外相に就任、駐米公使に栗野を抜擢するのです。ハーバード大学出身という経歴や率直で隠し事のない人柄の栗野は、短期間で条約改正調印に成功しました。

イタリア、フランス公使を歴任し、フランスとの条約改正も成し遂げ、パリ公演中の川上晋二郎を支援しています。そして、明治34年（1901）秋、日露戦争開戦間近のロシア公使を命ぜられます。ハーバードの学友小村寿太郎に説得されての赴任だったそうです。国交断絶の最後通告を渡し、無事にロシアを退出して帰国。しばしの平穩の後、再びフランス大使として日仏友好に尽力し、永年の功勞により男爵を授けられました。帰国後子爵となり、晩年は枢密院顧問を務め、昭和12年（1937）11月15日に87歳で亡くなりました。金子堅太郎とは永く親交を続け「葉山の筑前三人組」と呼ばれたそうです。長溥公の志は彼らを通して日本の近代化に活かされたのです。



栗野慎一郎年譜

年号	記事
嘉永4 (1851)	11月7日、荒戸谷町にて生まる
慶応3 (1867)	長崎へ留学、英兵殺害事件にまきこまれる
明治8 (1875)	アメリカ留学する（25歳） 帰国、外務省へ入省する（31歳） 英子夫人と結婚する 条約改正草案で青木周蔵と衝突する 外務省を退く 通信省へ入省する 大日本帝国憲法発布 再び外務省へ入る 駐米公使として渡米する（44歳） グレシャム國務次官と条約改正を成立、日清戦争（28年） イタリア公使 フランス公使、駐在武官の明石元二郎と会う（47歳） パリ万国博覧会で川上晋二郎を支援、帰国する ロシア公使（51歳） 日英同盟締結 日露戦争 帰国する（54歳） 特命全權大使としてフランスに駐在、男爵を与えられる 子爵を与えられる（62歳） 枢密院顧問官 11月15日、死去（87歳）
昭和7 (1932)	
昭和12 (1937)	

※年齢は数え年齢

ガイドツアー

参加者募集

鴻臚館と古代官道歩き

「古代のロマンを一緒に探しませんか」

蘇れ！鴻臚館

11月3日（日）10時～12時

福岡城むかし探訪館→鴻臚館展示館→屋外の南館礎石

古代官道を歩くA

11月10日（日）10時～12時

福岡城むかし探訪館→菅原神社→古代官道の十字路→平尾駅

古代官道を歩くB

11月17日（日）10時～12時

西鉄高宮駅西口広場→野間八幡宮→石投げ地蔵→三宅若八幡宮

参加費 一人につき500円（小学生以下無料）
申込み・お問合せ 福岡市民の会

TEL 092-716-8238
FAX 092-716-8254

Eメール staff@fukukakajokorokan.info
実施は5～40名 実施3日前（木曜日）締め切り



「福岡城花クラブ」

福岡市民の会では、新たに「福岡城花クラブ」を始めます。会員同士の親睦を深め、福岡城の新しい魅力を発見することを目的に年4回「福岡城花クラブ」を開催します。都会の中、福岡城には、まだまだ沢山の自然が残っています。数々の樹木、四季折々私達の目を惹きつけてくれる花々。小鳥のさえずりや虫の声、紅葉や雪景色等々……さあ！一緒に城内を巡りましょう。時には手作り弁当を食べながらお喋りするのでもいいですね。

一回目は12月8日（日曜日）13時半～15時です。

「福岡城花クラブ」を皆さんと一緒に楽しい会にしていきますよ。いろいろなアイデアをお待ちしています。

この会は、市民の会会員の方のみ参加できます。この紙面をご覧の皆様、ぜひ市民の会に入っ一緒に楽しみませんか。会員の皆様には「福岡城だより」送付の際、案内状を同封いたしますのでご覧ください。

第12期福岡歴史観光市民大学は、7月1日に開講、9月30日までに13回(20回)の講義が終了しました。

開講式冒頭、石井学長が「元号が改まった今年度も、市民大学が開講できます。熱心な受講者の皆様と、入念な資料で魅力的なお話をしてくださる講師の方のおかげです」とお礼とご挨拶を申し上げました。

今号では第1回から第10回までの講師、講義のテーマと内容を簡単に紹介します。(敬称略)

第1回 伊藤 浩司 アジアのなかの港市・中世博多

中世、日本最大の国際貿易港といわれた博多の役割と、そこで活躍した博多商人たち、博多をめぐる航路について、詳しく解説をしていただきました。

第2回 松尾 孝司 博多祇園山笠 伝統と明日

山笠が、現在のような「お祭り」になった経緯と、実際どのような日程で、どのようなことが行われているかを、実践者の視点から語っていただきました。

第3回 寺田 蝶美 筑前琵琶で語る九州戦国史

筑前琵琶の歴史と特徴をさらりと紹介してくださった後は、たっぷりの生演奏鑑賞タイムとなりました。琵琶の音色を聴きながら、九州が舞台となった合戦の様子を思い浮かべました。

第4回 西谷 正 宗像族と阿曇族

世界遺産登録2年を経ても人気不衰の宗像周辺で、かつて勢力をもっていた「宗像族」と「阿曇族」について、文献ではどう記述されているのかを教えてくださいました。またそのあたりに多数存在する古墳やその出土品の特徴にも言及されました。

第5回 有馬 学 九州の近代化産業遺産

記録することの大切さ、一方増え続ける「近代化遺産」をどのように記録・保存していくのがよいのかなど、学問としての難しさを話してくださいました。また、九州の名人・名所の解説もありました。

第6回 鈴田 由紀夫 九州の陶磁器

九州の焼き物の分類と窯の分布を教えてくださいました。特に高取焼については、その変遷が複雑だそうです。「これを覚えればあなたも専門家」と、ユーモアたっぷりに、わかりやすく話してくださいました。

第7回 榊原 英夫 邪馬台国論争の行方

人気のテーマ「邪馬台国はどこにあったのか」への先生の答えを、詳細な資料によりお示しいただきました。古文書に記載されている距離の他、音による検証アプローチもあり、新鮮な解説でした。

第8回 楠井 隆志 福岡の黄檗宗寺院・千眼寺の歴史と文化財

黄檗宗と、九州の黄檗寺院にある仏像の特徴について画像を映しながら解説していただきました。親しみやすい「いんげん」の導入部から、中国の仏像と日本の仏像の相違点など、引き込まれる内容でした。

第9回 千 相哲 観光客お国事情

講義のタイトル通り、国別に見られる訪日外国人旅行者の旅行に対する期待と行動、情報源の特色を挙げていただきました。「非日常」を経験するよりも「日常」を楽しむのが最近の観光客の傾向であると締めくくられました。

第10回 石井 幸孝 古代の街道をゆく —ローマ街道・秦直道から古代官道まで—

交通を制した者が天下をとったという例を、ローマ帝国の街道、秦の直道、日本の古代官道で示してくださいました。古代官道については、大和朝廷、大宰府、鴻臚館間の連絡の仕組みや駅伝制など、特に詳しい解説が圧巻でした。



第3回 7月16日寺田先生の筑前琵琶の生演奏



第6回 8月5日鈴田先生講義風景

新規会員名簿 (敬称略)

(2019年9月30日現在)

正会員(個人)

机元 浩 石津美智子

一般会員(団体)

福岡信用金庫

一般会員(個人)

有元 実 田中 雅美

編集後記

ラグビーのワールドカップが日本勢の勝利などで大いに盛り上がっています。

訪日外国人が増えている福岡市で、福岡城への観光客がなかなか広がっていません。市民の会では、福岡城の多くの魅力を発信していきたいと考えています。皆様のお知恵やお声をお待ち致しております。

編集・発行

NPO法人:福岡城市民の会

〒810-0042

福岡市中央区赤坂1-12-15 読売福岡ビル7階

TEL 092-716-8238 FAX 092-716-8254

HPアドレス <http://fukuokajokorokan.info>

E-mail staff@fukuokajokorokan.info

[デザイン・印刷] 城島印刷株式会社

福岡城市民の会

検索

報告 歴史探訪ツアー

「福岡」の地名は、この合戦により生まれる!

「黒田長政の関ヶ原合戦」を訪ねて

一 西暦一六〇〇年(慶長五年) 黒田長政の豊臣恩顧武将への「東軍引き込み事前工作」特に「福島正則」「毛利輝元」「小早川秀秋」への説得は、大成功を納めます。合戦終了後、関ヶ原の藤川台における東軍戦勝祝賀にて、東軍第一番の功労者として徳川家康から握手を求められたのは「黒田長政」でした。

二 関ヶ原の領土である菩提山城主・竹中半兵衛重治の息子「竹中重門」を西軍から東軍に引き入れます。合戦当日は、関ヶ原の地形に詳しい竹中勢と連携し、石田陣地の側面に対して、百挺の火縄銃で一斉射撃を浴びせ、石田勢敗走の要因となります。

三 関ヶ原合戦から遡ること二十二年前、織田信長の「黒田」の息子を殺

せ」と言う厳命から、人質の「松寿丸」を救ったのは、竹中半兵衛の機転でした。竹中家あつての黒田家です。結果「福岡城・福岡藩」が出来たことが、現在の「福岡市と福岡県」に繋がっています。



竹中家陣屋の長屋門

報告 第6回 文化人・経済人 交流 納涼会

8月29日「ごちそうダイニング なたつの花」にて開催

当会の会員の皆様同士の交流機会であるとともに、福岡城市民の会の活動に興味を抱いてくださっている、いわば「将来の会員」の方を含めて、親睦を深める会も6回を数えるまでになりました。

旧知の方と「こんな所で会おう」と意外な再会を果たされたり、開講中の市民大学の受講者や講師の学外交流の場となったり、異業種間交流会よりもさらに大きな輪ともいえるかもしれません。

サブライズを意識し、会場後方からいきなり登場されたソプラノの原田千春さん。劇団四季ご出身ということで、魅力的でしかも迫力のあるソプラノに、出席者の皆様は圧倒されました。からたちの花などの日本歌曲は、一緒に口ずさむ方あり、会場は一体感に包まれました。

台風の影響で当日おいでになれなかった方々、スケジュールの都合で来られなかった方々の次回のご参加をお待ちしております。

次回文化人・経済人交流 望年会は12月12日(木)18時に同じ会場で開催予定です。詳細は、福岡城市民の会にお問い合わせください。